

マイクロチップインプラント、マインドコントロール、サイバネティクス

Microchips implants, Mindcontrol, and Cybernetics

1999年10月23日季刊誌 SPEKULA 第3号

[エレナー・ホワイトのコメント：フィンランドの元最高医務責任者ラウニ・キルデ博士は、私たちを支持する勇敢な専門家のひとりである。キルデ博士は、英国ロンドンのトランスメディア・プロダクションが製作したビデオ（絶版）に出演したことで、CAHRA から賞をもらった。受賞銘板の文章を参照（awardist.htm）。キルデ博士は、次の記事をホームページに掲載することを許可してくれた。これは、これまで私たちが受けた支援の中で最も強力なものである。私たちは、キルデ博士に心から感謝している。]

次の記事のオリジナルはフィンランドの雑誌 SPEKULA（1999年第三四半期）創刊36周年記念号で公開されていた。SPEKULAは北部フィンランドの医科大学生とオウル大学の医師による出版物である。この雑誌は、フィンランドの医科大学生、北部フィンランドの医師すべてに郵送される。

マイクロチップインプラント、マインドコントロール、サイバネティクス
ラウニー・リーナ ルッカネン・キルデ医学博士
フィンランドの元最高医務責任者

ノーバート・ウィーナーは1948年に「サイバネティクス」を出版した。サイバネティクスは神経学的通信と制御の理論と定義され、当時小さなサークルですでに使われていた言葉である。「情報社会の父」増田米二は、ジョージ・オーウェルの小説のように管理主義的に、我々の自由がサイバネティクスという未知の技術によって脅かされているという懸念を1980年に表明している。サイバネティクスにより、人々の脳はマイクロチップインプラントを介して人工衛星とつながり、地上にあるスーパーコンピューターで制御される。

初めて脳インプラントが外科的に実施されたのは、1874年米国オハイオ州とスウェーデンのストックホルムであった。1946年、両親に知らせることもなく、乳児の頭蓋骨内に脳電極が挿入された。1950、60年代になると、動物や人間の脳に電極インプラントが行われるようになり、特に米国では、行動修正及び脳・身体機能の研究のために実施された。マインドコントロール法は人間の行動と態度を変える

ために使われた。そして、脳機能に影響を与えることは軍と諜報機関の重要な目標となった。

30年前、脳インプラントはX線測定で1センチメートルのサイズであった。その後のインプラントは米粒大になった。それらはシリコンで作られ、後にはガリウムヒ素で作られた。現在では首や背中に挿入するのに十分な小ささで、患者の同意の有無に関係なく、外科手術中に静脈注射して挿入することもできる。それらを検出し取り出すことはほとんど不可能である。

すべての新生児にマイクロチップを注入することは技術的に可能で、これにより一生彼らの本人確認が可能になるであろう。この計画は米国で秘密裏に議論されており、プライバシーの問題を公表することもない。スウェーデンでは1973年に、総理大臣オロフ・パルメが囚人へのインプラントを許可した。データ検査委員会元委員長ジャン・フレーゼは、1980年代中ごろに、老人ホームの患者に対してインプラントを行ったことを暴露した。この技術は、1972:47 STATENS OFFICIELLA UTRADNINGER（スウェーデン政府報告書）で明らかにされた。

インプラントされた人間はどこにいても追跡される。スーパーコンピュータが彼らの脳機能を遠隔的にモニターし、周波数を変えることによって脳機能に修正を加える。秘密の実験モルモットは、囚人、兵士、精神病患者、障害児、聴覚視覚障害者、同性愛者、独身女性、高齢者、学童などで、エリートの実験者が「末端住民」とみなした任意のグループの人々である。例えばユタ州刑務所の囚人の体験が公表されたが、良心的な人々にとっては衝撃的なものであった。

現在のマイクロチップは彼らを標的とする低周波数の電波により作動する。衛星の助けを借りて、インプラントされた人間は地球上のどこにいても追跡される。このマイクロチップ技術は、イラク戦争でテストされたもののひとつであると、カール・サンダース博士は述べた。彼は、注射型のインテリジェンス・マンド・インターフェイス（Intelligence-manned Interface）バイオチップを発明した（ベトナム戦争初期、兵士は血中のアドレナリンを増大するランボーチップを注射された）。米国家安全保障局（NSA）の200億ビット/秒のスーパーコンピュータであれば、遠隔的監視システムで戦場の兵士の体験を「見たり聞いたり」できるであろう。

5 マイクロミリメートルのマイクロチップ（髪の毛の直径は50マイクロミリメートル）が眼の視神経に配置され、インプラントされた人のすべての体験、匂いや視覚映像や声を統括する脳から、神経インパルスを抽出する。一度コンピュータに転送・格納された神経インパルスは、マイクロチップを介して人々の脳に戻すことが

でき、再体験が可能になる。地上基地のコンピュータオペレーターは、遠隔的監視システムを使い、電磁波メッセージ（符号化された）を神経系に送り込み被害者の行動に影響を与えることができる。遠隔的監視システムによって、健康な人に幻覚を見させ、頭の中で声を聞かせることができる。

あらゆる思考、反応、聴覚、視覚は、脳とその電磁場で特定の神経電位、スパイク、パターンを発生させ、また逆に、その神経インパルスから思考、画像、声を読み解くことができる。電磁波刺激は人々の脳波を変え、筋肉活動に影響を与え、拷問として痛みを伴う筋肉痙攣を起こすことができる。

NSA の電子監視システムは同時に何百万もの人々を追跡し操ることができる。私たちの脳は、固有の生体電気共鳴周波数を有しており、それは、固有の指紋を各人が持っているのと同じである。電磁波周波数脳刺激が完全に符号化されれば、パルス化された電磁波信号を脳に送ることができ、思い通りに被害者に聴覚・視覚効果を体験させることができる。これが電子戦争の形である。米国の宇宙飛行士は宇宙に送られる前、彼らの思考を追跡し感情を 24 時間記録できるようインプラントが実施された。

ワシントンポスト紙は 1995 年 5 月、英国皇太子ウィリアムが 12 歳の時にインプラントを施されたと報道した。もし、皇太子が誘拐されれば、特定の周波数の電波が彼のマイクロチップに向けられる。マイクロチップの信号は、人工衛星を經由して警察本部にあるコンピュータ・スクリーンに送信される。そうして、皇太子の動きを把握し、地球上のどこにいるのか確定できるのである。

マスメディアは、インプラントされた人々のプライバシーが残りの人生から奪われることを報道していない。彼らは多様な方法で操作される。異なる周波数を用い、この機器の秘密の運用者は人々の感情生活を変えることができる。攻撃的あるいは無気力にさせることもできる。性欲は人為的に操作することも可能である。思考シグナルと潜在意識の思考を解読し、夢に影響を与え、さらに誘導することができる。これらはすべて、インプラントされた被害者の同意もなければ知ることさえなくなされる。

完璧なサイバー兵士はこのようにして作ることができる。この秘密テクノロジーは市民や学術的な人々に知らされることなく 1980 年代からある NATO 加盟国の軍隊で使われている。専門誌や学術誌を見ても、この侵襲的マインドコントロールシステムの情報はほとんど入手できない。

NSA のシギント（通信、電磁波、信号等の、主として傍受を利用した諜報活動のこと）は、脳から放出される誘発電位（3.50Hz、5ミリワット）を解読することによって人間の脳からの情報を遠隔監視することができる。スウェーデン・ヨーテボリ、オーストリアのウィーンにおける囚人被験者には、「失語」の脳病変があることが判明している。通常脳インプラントが作動している場合、右前頭側頭葉の循環血液が減少し酸素不足が生じる。フィンランドの被験者では、脳の萎縮と酸欠による無意識の間欠的発作が観察された。

マインドコントロール技術は政治目的に利用されうる。今日のマインドコントロール運用者の目的は、標的となる個人やグループに対して、信念や最善の利益に反した行動を取らせることである。ゾンビ化された個人に殺人を行わせ、その記憶を何も思い出せないようプログラムすることができる。この現象の憂慮すべき実例はアメリカで見られる。

この静かな戦争は軍と諜報機関によって、何も知らされていない市民と兵士に対して行われている。1980年から脳電子刺激は、本人への通知や同意もなく、標的とされた人々を秘密裏にコントロールするため実施されている。すべての国際的人権合意文書は、合意のない人間の操縦を禁止しており、市民に対しては言うまでもなく、刑務所の囚人に対しても同様であるとする。米国上院議員ジョン・グレンの主導のもと、市民への電磁波照射の危険性についての議論が1997年1月から始まった。人間の脳機能を対象に電磁場や電磁波ビーム（ヘリコプター、航空機、駐車された白いバン、隣接した住宅、電柱、電化製品、携帯電話、テレビ、ラジオなどから照射される）を用いることは、民主的に選出された政府機関で対処すべき電磁波照射問題の一部である。

電子的マインドコントロールに加えて化学的方法も開発されている。心の変容薬や、脳機能に負の影響を与える異なる臭気を持つガスは、エアダクトや水道管から注入することが可能である。同じ方法で、細菌やウィルスも数か国で試験が行われている。

マイクロチップ（もしくは、マイクロチップを使わない最新の技術）と人工衛星を介して、私たちの脳機能を米国やイスラエルのコンピュータに接続する今日のスーパーテクノロジーは、人間性への重大な脅威となっている。最新のスーパーコンピュータは非常に強力で、全世界の人々を監視するのに十分である。人々が誤った前提に立ち、自分の体にマイクロチップインプラントを許すことになった場合、一体何が起こるのであろうか？ひとつの誘惑はマイクロチップIDカードである。IDインプラントの除去を犯罪とする強制立法が秘密裏に米国で提案された。

あなたは、人類のロボット化や思想の自由を含むプライバシーの完全なはく奪に対して心の準備はできていますか？最も秘密にしたい思考を含む自分の人生をビッグブラザーに譲り渡したいと考える人がいるであろうか？しかし、全体主義的「新世界秩序」を形成するための技術は存在する。神経論理的コミュニケーションシステムは、独立した思考を妨害し、利己的な民間人や軍隊の利益のために社会的・政治活動を管理する目的で存在している。

我々の脳機能が無線インプラントとマイクロチップですでにスーパーコンピュータに接続されているならば、抗議するには遅すぎるであろう。この脅威は、入手可能な生体遠隔測定の研究や国際会議で交換した情報を用いて、市民を教育することでしか打ち負かすことはできない。

この技術が国家機密のままであり続けている理由の一つは、米国精神医学会が作成し、18カ国語で出版されている「精神疾患の診断・統計マニュアル第4版」が広く受け入れられていることである。米国諜報機関のために働く精神科医は、何の疑いもなくこのマニュアルの執筆と改正に参加していた。この精神科医の「聖典」は、マインドコントロールによる行動に対して、妄想型統合失調症の症状のラベルを貼り付けることでマインドコントロール技術を隠蔽している。

マインドコントロール実験の被害者は、医科大学で「精神疾患の診断・統計マニュアル」の症状リストを学んだ医師によって、日常的に妄想型統合失調症とほぼ反射的に診断される。自分の意志に反して標的にされているとか、電子的・化学的・細菌学的形式の心理戦争におけるモルモットにされていると患者が訴える場合、医師は、彼らが真実を語っていると判断しないように教えられている。

軍事医学の方向性を変え、人類の自由な未来を確保するために残された時間は少ない。

ラウニー・キルデ (Rauni Kilde) 医学博士 2000年12月6日